

4年 社会科学学習指導案

授業者 飯塚 亮太

1. 単元名 「南海トラフ地震から、命をどのように守る？」（自然災害から人々を守る活動）

2. 単元の目標

- 地震災害の被害を防いだり、減らしたりするために、県や市、地域の人々が、自助・共助・公助の視点から協力し合い、住んでいる人の思いや環境に合わせ、命を守るための防災方法に取り組んでいることを理解する。 [知識及び技能]
- 下田市吉佐美地区の防災について、吉佐美地区の人々の情意にふれながら、その土地に住む人々の生活や環境を考慮した防災方法を考えていくことで、自分や家族の命を守りつつ、地域の人々とも助け合えるバランスを意識した防災方法を自分の言葉で表現する。 [思考力、判断力、表現力等]
- 地震災害の防災方法について、主体的に追究していくことで、災害における自助・共助・公助の相互関係をもとに、災害時における共助への関わり方を考え、学習したことを日常生活の中で生かそうとする。 [学びに向かう力、人間性等]

3. 子どもと教材

本学級の子どもは、それぞれの視点で思いを語り、比較することで互いのよさを際立て、学びを深めたり、行動に移そうと動き出したりする。社会科の授業の中では、西伊豆町を元気にするために、どうしたらよいのかと話し合いを行った。「ところてん祭りはさ、ところてんを広めるために行う意味があるよ」と、ところてん製造業者の立場になって考えたり、「不便さを解消するためにさ、鉄道を造るとかバスの本数を増やすとか、交通面にお金を使った方がいいよ」と地域が抱える問題に目を向けて考えたりした。出会った人々の情意にふれ、人の思いを大切に物事を考える子がいれば、現実的な視点で、社会的事象が抱える問題の原因を解決すべきだと考える子もいる。議論を通して、視点を明確にしたり、異なった立場から反対をしたりと、根拠を明確にして思いを発信することにつながり、互いのよさを際立てていった。単元の終盤では、「ポスターとか作ってさ、西伊豆町を応援しようよ」と自分にできることを模索し、西伊豆の魅力を発信しようと構成やイラストを友達と考えながら、仕上げることができた。

一方で、それぞれの思いを汲み取って、協力して行動しようとすることに集団として成長する伸びしろがあると感じている。相棒学年の3年生と、絆を深めるために共に農作物を育て、成功体験を味わおうと夏休み前にさつまいもを畑に植えた。しかし、夏休み明けには、雑草が茂ってしまい、さつまいもの様子が確認できない程であった。この状況に直面した子どもたちのあらわれは様々であった。ある子は、自分のさつまいもが枯れてしまっているのにも関わらず、クラスと相棒のためにとチャイムが鳴るまで草取りをした。ある子は自分のさつまいもの周りのみ、雑草を抜き、残りの休み時間は、友達とのサッカーを楽しんでいた。また、「草取りって強制じゃないよね？」と教室で休み時間を過ごす子もいた。集団として課題を乗り越えるためには、自らの時間や労力をかける必要がある場面もある。それぞれの視点で思いを語り、互いの良さを際立て、学びを深めるというよさが本学級にはあるが、集団として一つのことに向かうときに、個々の考え方の相違により、負担が多くかかってしまう子が生まれてきてしまう。個々の考えが異なる中で、周りに目を向けて、自分に何ができるか考えて行動することに、本学級の伸びしろがあると考え。ここで、助け合いという概念を授業の中で取り扱い、子どもが集団生活でどのような行動を取るべきかを立ち止まって考えることで、本学級の伸びしろを伸ばし、集団生活において、自分に何ができるのかを考え、それぞれの良さを集団に生かしていくことを願う。

夏休みの生活を振り返る際には、「カムチャツカ半島の地震で、津波警報出たじゃん？電車止まって、塾から帰れなかったよ」「おれは、家に居たからあんまり困らなかった。防災のバック？とか用意してないけど、何とかなるんじゃない」「えー！防災バック無いの？うちは用意してあるよ」とカムチャツカ半島の津波警報について、災害の影響や困り感、防災方法について、話題に上がる場面があった。地震災害は、

大雨、洪水など他の災害と比べて、事前予測が難しいことに加え、命を脅かす被害をもたらす。だからこそ、日頃の生活の中で備えを十分にしておく必要がある。今後の大規模な地震災害として、南海トラフ地震が想定されている。子どもの生活に甚大な影響を及ぼす地震災害を本単元で扱うことにより、子どもが考える防災方法により具体性が帯びるのではないだろうか。下田市吉佐美地区は、県内で最大規模の33mもの津波が想定されているにも関わらず、観光に重きを置き、防潮堤がない。そこで、防災グッズの準備や食料の備蓄などといった自助や地域の共助が一層大切になるだろう。吉佐美地区で民宿を営む榎野さんは、災害時には、地域や観光客のために帰宅困難民を無償で受け入れる心づもりをしている。また、食堂を営む河井さんは、避難先が分からない観光客がいる場合、誘導を率先して行う役目があると自負している。自分の労力が増えたとしても、周りのために力を尽くそうとする吉佐美地区の人々の姿が、本学級の子どもの伸びしろと重なると思う。自分の命だけは守ろうと利己的に振る舞うことが、社会生活の幸せにつながるとはいえないだろう。一方で、周囲の人を助けようと自分のことを省みずに行動した結果、自分や家族が困難な状況になる可能性がある。助け合いを具体で考えていくと、どこかで助け合いという行動に線を引きことが求められるのかもしれない。自分と家族の命を守りつつ、周りの人々の命を助けるというバランスを保ち続けることが防災観として大切であると思う。本単元を通して、子どもは、命を守るための方法を様々な視点で考えるだろう。完璧な防災方法がなく、納得解である事象ゆえに、それぞれの視点で防災方法を語ったり、実際に生活の中で生かしたりするという子どものよさがより発揮されるだろう。そして、本単元が、周囲の人々を助けるために力を尽くす吉佐美地区の人々と出会い、自らの思いや生活と結びつけることで、それぞれの思いを汲み取って、協力して生活しようとする子どもの姿を支える一助となることを願っている。

4. 本単元における『その子らしく学ぶ』

子どもは、南海トラフ地震の津波被害が大きいと想定されるにもかかわらず、下田市吉佐美地区に防潮堤が無いという事実疑問を覚え、追究を始めるだろう。吉佐美地区の海岸に、自分が夏に海水浴に行った経験を重ねる子もいれば、食堂まるかわで盛田屋のところてんが提供されていることに親近感を覚える子もいるだろう。吉佐美地区の防災方法という社会的事象との結びつきによって、吉佐美地区の人々に寄り添い、自然環境や景観を守りたいと思う反面、命を守ることを優先すべきだと考え、葛藤することが想像できる。そんな中、食堂まるかわを営む河井さんと民宿を営む榎野さん、そして防災自治会長の進士さんの情意にふれていく。河井さんは、夏場の海水浴シーズンが過ぎると、ライフセーバーが海からいなくなる。そこで、多田戸浜でサーフィンを楽しむ人達が、災害時に困らないように誘導するのが「自分の役目」だと語る。また、榎野さんは、カムチャツカ半島の地震の際には、電車が泊まり、帰宅困難になった観光客のために無料で部屋を開放した。榎野さんはそうしたことも「当たり前のこと」だと語る。一方で、防災自治会長の進士さんは、防災倉庫の備蓄管理など、地区のために力を尽くしながらも、共助によって、命が危険に晒されることを危惧し、自分の命は自分で守ることに重きを置くべきだ、共助を頼りにしてはいけないと語る。共助のあり方について、助け合うとは、どういう思いや行動が大切なのか、その子ならではの情意や思考をめぐらせていこう。近所に住むお年寄りの避難にどのように関わるのか、助け合いの結果、自分や家族の命を危険に晒してしまってもよいのかなど、共助を多様な視点で価値判断をしていこう。周りのために力を尽くす河井さんや榎野さん、命の責任は自分でもつべきだという進士さんの情意にふれ、その情意に自分の共助の考え方をそれぞれに重ねていこう。そして、災害時の場面や状況など、具体を踏まえて、命の守り方を話し合うことで、その子ならではの共助の考え方が際立っていく。共助について再解釈・価値判断を繰り返した結果、共助とは、人の状況や環境を見極めて、察する力が必要であり、その時々で正解が変わっていくものだ気付く。子どもが、自分や家族の幸せだけでなく、周囲の人々の幸せにどのように関わっていけばよいか考え続けることが、防災において大切だと新たな気付きを得ることを願う。周囲の人々を大切にしていこう吉佐美地区の人々と出会い、防災方法や周囲の人のために行動するという共助の概念を更新させていくことで、自分のこれまでの集団への関わり方を見つめ直す経験につながることを願う。

5. 単元構想（全7時間扱い／本時は第⑥時）

＜教師の投げかけ＞

子どもの表れ

最終時における子どもの表れ

○教師の働きかけ

① <これって何だと思う？>

- ・津波を防ぐ壁なんじゃない？海沿いで見たことあるよ
- ・防潮堤っていうんだね、南海トラフ地震が来るかもしれないから、津波を止めるためにあるんだよ！
- ・カムチャツカの地震のとき、静岡にも津波警報が出たよ

南海トラフ地震ってどれくらいの大きさの津波がくるのかな

- ・ぼくが住んでいる清水区では、12mくらいの津波が来るみたいだよ、12mってどれくらいだろ？
- ・10mの津波で完全に建物が水没してあるよ、それに1mの津波に巻き込まれると、ほとんどの人が亡くなるみたい
- ・一番大きい津波だと、下田市で33mだって！やばいじゃん！
- ・陸の方でもさ、津波が川を上ってくるってあるよ

<下田市吉佐美地区は、防潮堤の高さが何mだと思う？>

- ・33mは最低でも必要なんじゃないかな
- ・予想だから津波がもっと高い可能性があるよね
- ・予想の高さは超えた方がいいから、35mくらいかな

- ・防潮堤の高さが0mって、防潮堤が無いよね？
- ・33mの津波が来るのに、なんで防潮堤がないの？

② 下田市吉佐美地区は、なぜ防潮堤が無いの？

- ・単純にお金が無いんじゃない？ほら、西伊豆だって人口が減って、困ってたじゃん。同じ伊豆だし！
- ・そもそも人があまりいないから、防潮堤がいらないんだよ
- ・人はいるけど、海から遠いところに住んでいるんじゃない？

下田市吉佐美地区ってどういう場所なのかな？

- ・海水浴場とかホテルとかがあるね、観光客が多いのかな
- ・住宅地があるよ、人がけっこう住んでいるじゃん！

- ・防潮堤が無い理由はさ、山に向かって逃げれば津波から避難できるからじゃない？
- ・防潮堤があるとき、海を目的に来た人ががっかりするから？
- ・住んでいる人の方が優先だよ、海なら別のとこいけばいいし！
- ・本当は造ろうとしたのに、中止したの？造ればいいのに！

③ 防潮堤建設を中止した理由を市役所の人に聞いてみよう

- ・やっぱり、観光客が減ると、ホテルとか旅館とかに払われるお金も減って、そういう仕事をしている人が困るよね
- ・自助、共助、公助っていうのがあるんだね、防潮堤は公助か
- ・吉佐美の人たちの生活には、美しい海と砂浜が共にあるんだね
- ・市や地域が話し合っ、吉佐美の人たちの生活に合った防災方法を選ぶために、自助と共助に力を入れているんだね

○第①時では、子どもが対象についての関心を高めるために、資料から防潮堤の仕組みや働きなどを確認する。また、津波対策に関心を高めるために、津波の概念や南海トラフ地震の津波被害について、資料で確認する。

○県内最大の津波が想定される下田市に、なぜ防潮堤を建設しないのかという問いに切実感をもって、追究していけるよう、津波を防ぐためにどの程度の高さの防潮堤が必要か考え、答えとして0mという事実を提示する。

○子どもが、吉佐美地区に防潮堤が無い理由をより多角的に考えるために防潮堤ができるメリットやデメリットなどを予想し、話し合う場面を設定する。

○第②時では、根拠を明確にして、防潮堤が無い理由を考えていくために、下田市吉佐美の様子を地図やグーグルストリートビューなどで確認する。その際に子どもが、心理的距離を短く感じていけるよう、食堂丸川が盛田屋からところてんを仕入れていることにふれ、自身との共通点を探す場面を設定する。

○子どもが、津波の被害に気付いていけるよう、吉佐美地区のハザードマップを提示する。また、過去に起きた地震被害の資料を提示する。

○子どもが、自助・共助・公助によって、命を守る防災方法が支えられていることをつかんでいくために、下田市吉佐美地区の防災方法についてオンラインインタビューする機会を設ける。

④

<インタビューしたことを確認しよう>

- ・自助と共助にどんなことがあるか調べてみたよ
- ・自助は防災グッズの準備とか、自分にできることで、共助は、壊れた建物から人を助けるとか、みんなでできることだよ

⑤

吉佐美の人たちは、防災についてどう思っているのかな

食堂まるかわの河井さんは、地震が来たら、10分くらいで津波が来るから、とにかく高いところに避難することが大切だって、言っているよ。吉佐美の小学校は、山に避難するんだって。避難することを一番に考えているんだね

- ・食堂まるかわの河井さんは、近所の人や観光客を助けるつもりでいるんだね
- ・民宿の槇野さんは、無料で民宿を開放したんだね

自主防災会長の進士さんは、人を助けようとして亡くなることがあるって言っているよ。共助は、頼りにしてはいけないうて

⑥
(本時)

吉佐美の人たちは、これから先、どのように命を守っているのかな

- ・一人暮らしのお年寄りには、避難がきっと大変だよ。だから近所の人々が助けてくれると安心するよね
- ・槇野さんが言う「当たり前」って、吉佐美の海が好きで人達を守りたいんだよ。困っている時に助け合うことが大切なんだよ

進士さんはさ、東日本大震災のときに人を助けようとして消防団の人が亡くなったって言っていたよ。共助を頼りにするんじゃなくてさ、自分の命を自分で守るためにも、自助が大切だよ。まずは、自分の命を優先した方がいいよ

- ・助け合いって、正解がないよね。共助が大切って分かるんだけど、状況によって変わってくるよ。どうすればいいのかな？
- ・困っていないように見えても、危ないときってあるよね。人の気持ちとか、危険を察する力が必要で、どう行動するのか見極める必要があるんじゃないかな

⑦

<学んだことを振り返ろう>

- ・自助と共助、どちらも大切だよ。自分で津波に備えておいて、いざという時に状況を見ながら、共助をしていくバランスが大切なんだよ
- ・市役所の人も言っていたけどさ、地域と市が助け合って、吉佐美の人達に合った防災に取り組んでいるんだね
- ・どこまで助け合うかはさ、察する力が必要なんだよ。そのために吉佐美の人々は日頃からつながりが深いんだと思うよ
- ・近所の人に挨拶をしたり、ちょっとした話をしたり、普段の生活にも共助のきっかけになることってあるかもしれない

○第④時では、子どもが、自助と共助の具体をつかむために、資料の提示や調べ学習の時間を設ける。

○第⑤時では、防潮堤が無い吉佐美の人たちがどのように避難をしているのか、その実際を確かめられるようにインタビュー資料を提示する。

○第⑥時では、子どもが、それぞれの考え方の違いに目を向けていけよう、吉佐美の人たちの共助の考え方で、共感する方にネームプレートを貼る場面を設定する。

○A男が、共助とは、状況や人の気持ちを察する力が必要だと感じていけるように、どのような思いや判断で共助を行うのか、問いかけていく。

○必要に応じて、子どもが共助のメリット・デメリットを考えるために過去の震災の資料を提示する。

○第⑦時では、自分なりの共助とはどんなことを指すのか、考えをもつことができるよう、吉佐美の防災について感じたことを問いかけていく。

○日常生活にも、共助のきっかけになる出来事があると実感するために、日頃の生活の具体的な場面と共助のつながりについて考えられるように問いかけていく。